和歌山市文化体育振興事業団調査報告書　第26集

鳴神VI遺跡　第５次発掘調査概報

２００１

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

序　文

和歌山市は、和歌山県の北西部に位置しており、紀ノ川によって運ばれた土砂により形成された和歌山平野を中心とした地域です。その肥沃な平野には古代より人々が生活を営み、市域には遺跡が数多く残されています。中でも今回の調査地である鳴神周辺地域には、国史跡の鳴神貝塚や特別史跡である岩橋千塚古墳群を始め、古墳時代の水田跡を確認した鳴神Ⅴ遺跡や秋月遺跡など周辺に著名な遺跡が集中しており、和歌山市の歴史を考える上で重要な地域であるといえます。

鳴神Ⅵ遺跡はこれまで４回に渡って調査が行われてきましたが、その結果、旧河川の存在が明らかにされ、今回の調査においてもその一部を確認することができました。ここに報告する概要報告書が、地域の歴史の解明に活用されれば幸いです。本書が広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたり御指導、御協力を頂きました関係各位の皆様に深く感謝いたします。

平成 13 年 3 月 31 日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

理事長　喜　多　誠　一

例　　言

1．本書は、和歌山市が計画した和歌山市鳴神 916-12 番地他に計画した市道拡幅工事に伴う発掘調査の概要報告書である。

2．調査は、和歌山市の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、対象面積約 120 ㎡を 2000 年 7 月 17 日から同年 8 月 31 日までの期間で実施した。

3．発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

和歌山市教育委員会		財団法人和歌山市文化体育振興事業団	
教育長	山口喜一郎	理事長	喜多誠一
文化財室長	榎本直樹	総務室長	藤田光彦
文化財班長	小原保誠	主　事	西山佳宏（調査庶務担当）平成 12 年 7 月 31 日まで
学芸員	益田雅司	主　事	山口美二（調査庶務担当）平成 12 年 8 月 1 日から
		学芸員	髙橋方紀（発掘調査担当）
		学芸員	川口修実（　　〃　　）

4．本概報掲載の遺跡・遺構及び本概報掲載の遺物写真撮影は髙橋と川口が分担して行った。

5．本書の執筆は発掘調査担当の髙橋、川口が分担し、編集は髙橋が行った。各執筆分担の文責は目次に示した。

6．写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。

7．瓦の名称・計測部位等については、和歌山市文化体育振興事業団調査報告書第 22 集の凡例に準拠した。

8．概要報告書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1．調査の契機と経過……(髙橋方紀)…… 1

2．位置と環境……(川口修実)…… 2

3．既往の調査……(髙橋)…… 4

4．調査の方法と経過

（1）調査の方法……(髙橋)…… 5

（2）調査の概要……(川口)…… 6

5．遺構……(髙橋・川口)…… 7

6．遺物……(川口)…… 10

7．まとめ……(髙橋)…… 14

報告書抄録…… 16

図版目次

図版１　調査前の状況（北東から）、 調査前の状況（西から）

図版２　第１区 第１遺構面全景（南から）、第２区 第１遺構面全景（東から）

図版３　第１区 第２遺構面全景（西から）、第２区 第２遺構面全景（東から）

図版４　１－４区 SD－４～８（北から）、２－１区 SD－８～11、P－11（北から）

図版５　第１区 サブトレンチ１全景（北から）、第２区 サブトレンチ４・５全景（東から）

図版６　１－２区 西壁土層堆積状況（東から）、１－４区 西壁土層堆積状況（東から）

図版７　２－１区 北壁土層堆積状況（南から）、２－２区 北壁土層堆積状況（南から）

図版８　弥生土器、土師器、須恵器

図版９　土師器、肥前系磁器、産地不明陶器、土師質土器

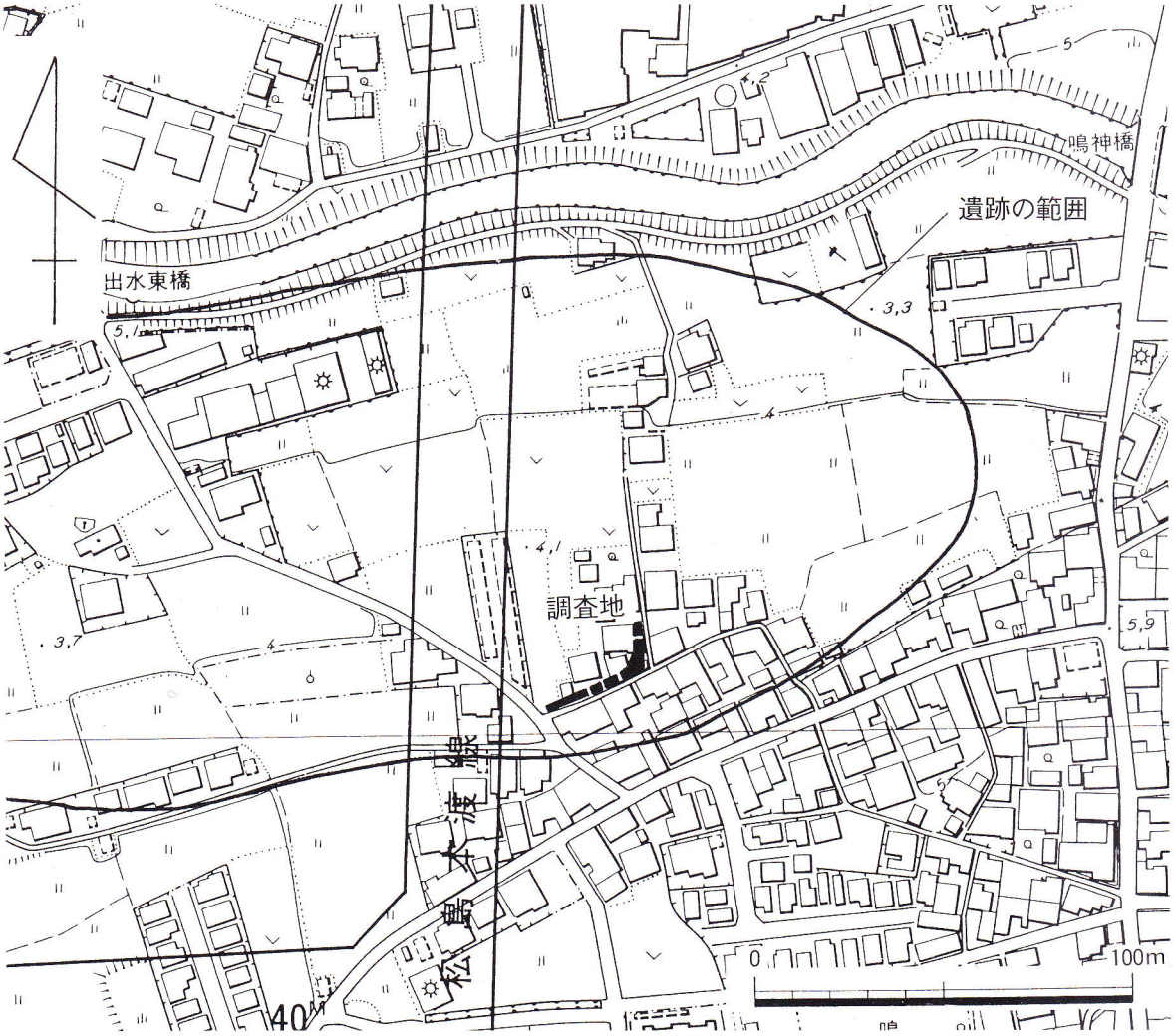
図版10　軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、隅軒丸瓦、石製品

1. 調査に至る契機と経過

鳴神Ⅵ遺跡（遺跡番号 320）は紀ノ川下流域南岸の平野部に立地する遺跡である。今回、和歌山市が和歌山市鳴神 916-12 番地他において道路拡幅工事を実施することになったが、その区間が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された遺跡の範囲内に相当することから、和歌山市教育委員会が指導を行い、工事に先立って発掘調査を行うこととなった。調査は和歌山市教育委員会の指導のもとに、同市から財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて実施したものである。

調査対象地は鳴神Ⅵ遺跡でも南東部に位置している（第１図）。本遺跡ではこれまでに４次にいたる調査が行われており、各調査で河道の堆積とみられる砂礫層が確認されるとともに、弥生時代から江戸時代に至る各時代の遺物が出土している。また、南東約 400 m で行われた鳴神Ⅳ遺跡第６次調査では古墳時代中期後半から後期前半の住居群や後期後半の方墳が検出されており、調査地南側には古墳時代の集落が存在していたことが明らかになっている。

今回の調査は第５次調査にあたるもので、対象面積約 120 ㎡を１ヶ月半の期間で行った。なお現地調査は排土処理や近接地への進入路確保の都合上、第１区と第２区の２回に分けて行い、第１区は７月 17 日から８月 10 日、第２区は８月 17 日から 31 日の期間で実施した。



第１図　調査位置図

2. 位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町・阪南市に、東は和歌山県那賀郡岩出町及び貴志川町に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面する。本市は和泉山脈の南裾に沿って西流し、紀伊水道に流れ込む紀ノ川により形成された和歌山平野を中心に立地する。今回報告する鳴神Ⅵ遺跡（1）は、和歌山平野の中央部、紀ノ川南岸の沖積平野に位置し、紀ノ川の分流である旧大門川の氾濫原及びその流域内に立地する（第２図）。

次に周辺の遺跡について概観すると、縄文時代の遺跡では紀ノ川南岸に鳴神貝塚（9）や吉礼貝塚などが位置する。鳴神貝塚は近畿地方で最初に発見された貝塚として著名であり、縄文晩期の耳栓が出土した土壙墓や甕棺が検出されている。吉礼貝塚からは縄文時代前期前半から後期の遺物が出土しており、紀ノ川流域における縄文時代の遺跡では最古のものである。これらの貝塚から出土する貝類は、海水系のものが多数あり、海岸線が岩橋山塊西側にまで及んでいたことを示している。

当地域周辺は紀ノ川の堆積作用による陸化の進行が最も早く進行した地域である。弥生時代には当遺跡周辺の平野部において、太田･黒田遺跡（2）、秋月遺跡（5）などの遺跡が知られるが、その内容が比較的明らかなものは、太田・黒田遺跡のみである。太田・黒田遺跡は、前期から中期を中心とした県内最大規模の集落跡であり、竪穴住居や井戸などの集落域、水田などの生産域に関わる遺構と、土壙墓・土器棺などの埋葬施設が確認できる。多量の弥生土器の他、直柄広鍬や銅鐸など注目される遺物が出土している。中期には紀ノ川北岸に北田井遺跡（24）、宇田森遺跡などの集落が営まれるようになる。後期には、遺構・遺物の出土は極めて少なく、代わって丘陵部に高地性集落が出現し、当遺跡周辺でも後期後葉まで集落の形成は見られなくなる。

古墳時代の集落も引き続き、平野部を中心に立地しており、友田町遺跡（4）、大日山Ⅰ遺跡（12）や鳴神遺跡群からは多数の竪穴住居、掘立柱建物などの遺構が検出されている。これら岩橋山塊西部の遺跡では、音浦遺跡（8）、大日山Ⅰ遺跡、鳴神Ⅴ遺跡（6）、鳴神Ⅱ遺跡（10）から現代の用水路と流路方向を同じくする溝が検出されている。その中には旧河道を再掘削しているものもあり、この地一帯が水路として重要な地域であったことが知られる。またこれらの遺跡からは、滑石製模造品や手捏ね土器等の祭祀遺物が出土していて、河川や用水に関わる祭祀が行われていたとも考えられている。古墳の築造は、前期末には花山丘陵上に花山古墳群（11）が造営されるが、平野部に位置する秋月遺跡、鳴神Ⅴ遺跡でも、庄内式新段階から布留式古段階にかけての前方後円墳、方墳が集落の近傍で検出されており、それに先行するものとして注目できる。その後、中期後半～後期にかけて岩橋山塊には岩橋千塚古墳群（13）が形成され、連綿と古墳の造営が続けられた。一方では中・後期の方墳が秋月遺跡、鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡において築造されており、鳴神Ⅴ遺跡では土壙墓、箱式石棺墓も営まれ、平野部においても墓域が展開したことが知られる。

歴史時代以降は、秋月の地に鎮座する日前･国懸宮が、『日本書記』にその名が見え、その起源説話が記されている。またこの地域南方一帯は、県内最大規模の条里制地割が良好に残っている地域であり、これらは河南条里と呼称されており、それに関わる遺跡が確認できる。

奈良時代では、太田・黒田遺跡、秋月遺跡、大日山Ⅰ遺跡が知られる。太田・黒田遺跡では建物遺構は未確認ながら、大型の井戸が２基検出されている。７世紀前半の井戸底からは斎串等が、８

世紀後半の井戸からも和同開珎42枚、万年通宝4枚がまとまって出土しており、井戸祭祀に関わるものとして注目される。また鳴神Ⅴ遺跡においても溝、土坑が検出されている。

平安時代には、当遺跡周辺では多数の遺物が出土しており、特に鳴神Ⅴ遺跡では段構成土と呼ばれる土壇状遺構から、平安時代中期の多量の遺物が出土している。特に緑釉陶器、灰釉陶器、初期貿易陶磁器、陶硯、土馬などの特記すべき遺物がみられる。また大日山Ⅰ遺跡においても多数の掘立柱建物が検出されていて、奈良時代から平安時代にかけてのものと考えられる。

鎌倉時代には、鳴神Ⅴ遺跡において溝、河道、石組井戸群、土壙墓などが検出されているが、前代までに比して大要が明らかな遺跡は少ない。

室町時代には、太田・黒田遺跡において大型の濠状遺構、溝が確認されている。濠状遺構は、幅約10m、深さ3m以上、長さは約130m分が確認されていて、ともに16世紀後半に埋没している。これらは廃絶時期が共通することから、雑賀衆の太田城跡(3)に関わるものと推定されている。

江戸時代の遺跡としては、和歌山城(20)とその城下町があげられる。鷺ノ森遺跡(21)は、三の丸北側の町屋に相当し、調査の結果江戸時代の遺構面が3面以上検出され、道路、排水施設、鍛冶炉、礎石建物、井戸、便所、蔵、水琴窟等多くの遺構・遺物が出土している。また鍛冶作業は江戸前期に盛行し、中期には衰退するなど、城下町の変遷が明らかにできる遺跡として重要である。

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～江戸	7	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～江戸	13	岩橋千塚古墳群	古墳	19	津秦遺跡	弥生
2	太田・黒田遺跡	弥生～奈良	8	音浦遺跡	古墳	14	寺内古墳群	古墳	20	和歌山城跡	近世
3	太田城跡	安土・桃山	9	鳴神貝塚	縄文～弥生	15	吉礼砂羅谷窯跡	古墳～奈良	21	鷺ノ森遺跡	弥生～江戸
4	友田町遺跡	弥生～平安	10	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安	16	井辺前山古墳群	古墳	22	田屋遺跡	弥生～古墳
5	秋月遺跡	弥生～平安	11	花山古墳群	古墳	17	井辺遺跡	弥生	23	西田井遺跡	弥生～古墳
6	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	12	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良	18	神前遺跡	弥生	24	北田井遺跡	弥生～古墳

第2図　鳴神Ⅵ遺跡周辺の遺跡分布図

3. 既往の調査

鳴神Ⅵ遺跡は、紀ノ川南岸の平野部に立地する遺跡である。遺跡の推定範囲は東西約 300 m、南北約 150 m を測り、これまでに財団法人和歌山市文化体育振興事業団により４度の調査が実施されている。その調査位置は第３図に示したとおりである。以下にその調査の概要を述べる。

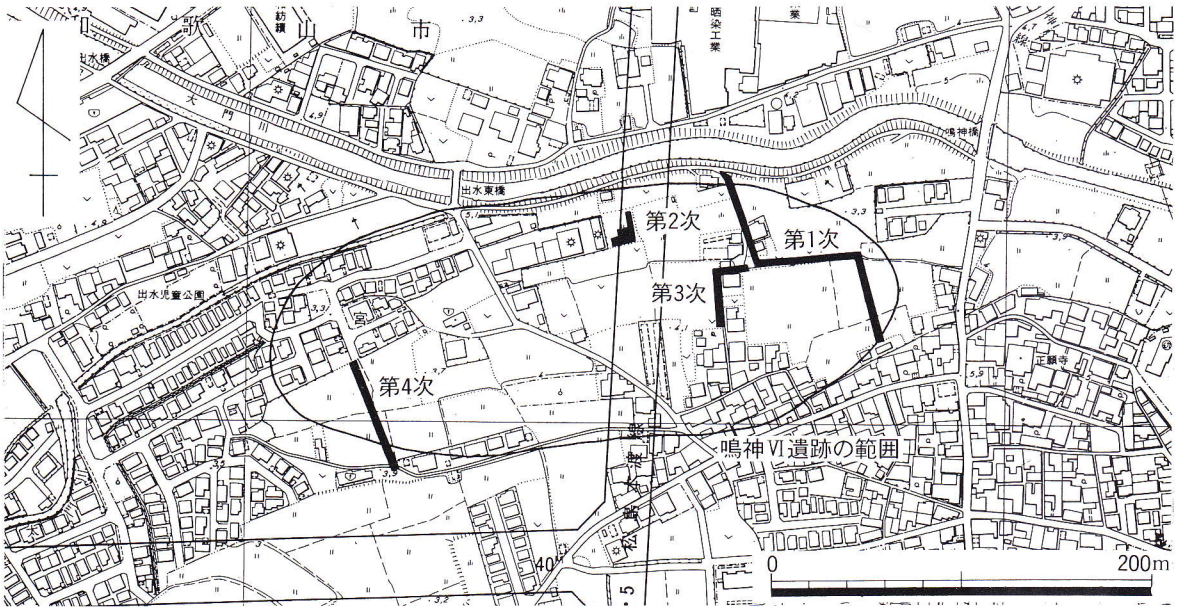
第１次調査（平成２年度）　道路敷設工事に伴い 720 ㎡の調査が行われた。耕作土の下面において江戸時代のものと思われる東西方向の小溝群が検出されている。その下層では砂礫層を確認しており、縄文土器を始め、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、瓦器、輸入青磁、国産陶磁器、瓦等が出土している。

第２次調査（平成３年度）　共同作業場建設工事に伴い 200 ㎡の調査が行われ、江戸時代以降と考えられる東西方向に延びる石組の溝を１条検出している。溝は結晶片岩を主要な石材とするもので、左右に２段ずつ組み側壁としている。底石はみられなかった。また上部には、半月状に割った杉の丸木を利用した蓋がみられた。出土遺物は下層の砂礫層からの出土で細片が多いが、弥生土器・土師器を始めとして江戸時代に至る各時代の遺物が出土している。

第３次調査（平成３年度）　道路改良工事に伴って 280 ㎡の調査が行われた。旧流路の堆積と考えられる砂礫層を検出し、その堆積が北から南への方向性をもつこと、またその後の段階で南から北へ方向性が変化することが確認された。出土遺物は第１・２次調査同様、各時代のものがみられる。

第４次調査（平成６年度）　道路改良工事に伴って、430 ㎡の調査が行われた。遺構面を２面確認しており、第１遺構面では近・現代の土坑、溝、第２遺構面では江戸時代に埋没したとみられる東西方向の小溝 14 条と旧河道の南岸部が検出された。遺物は弥生時代から近・現代に至る時期のものが出土している。

【参考文献】
『鳴神Ⅵ遺跡 発掘調査報告書』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1991 年
『鳴神Ⅵ遺跡 第２次発掘調査報告書』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1992 年
『鳴神Ⅵ遺跡 第３次発掘調査報告書』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1992 年
『鳴神Ⅵ遺跡 第４次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995 年



第３図　既往の調査地

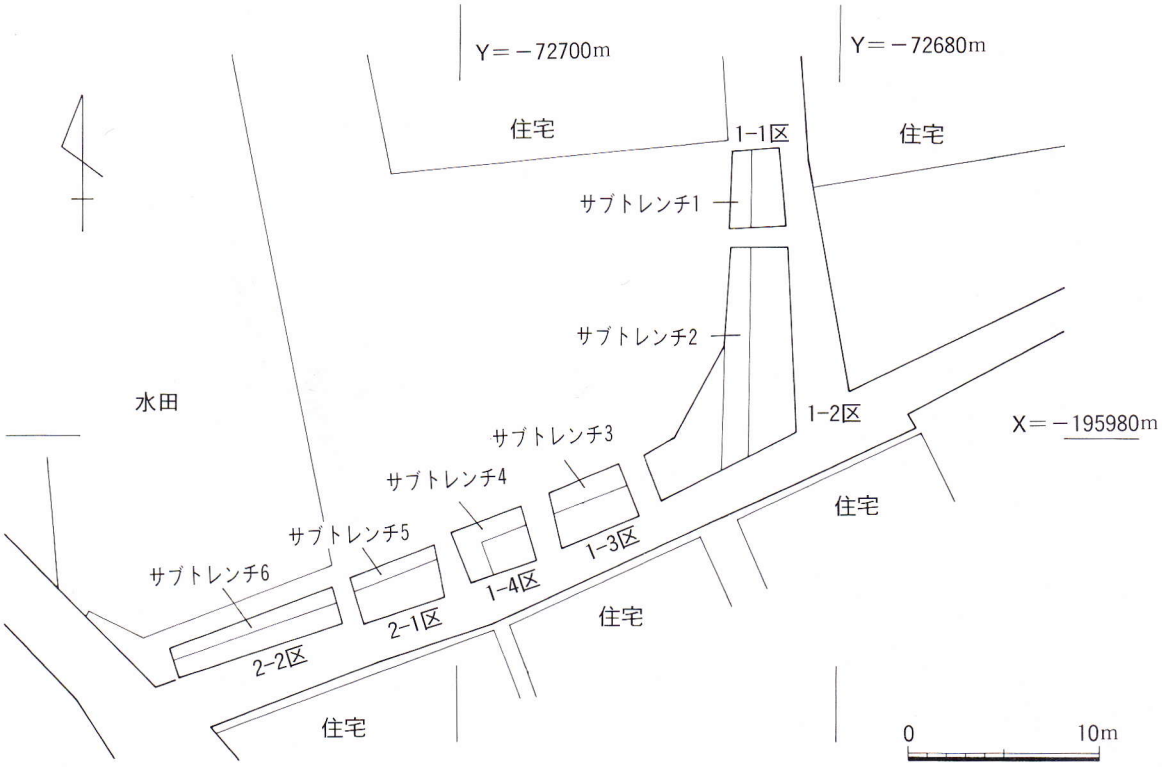
4. 調査の方法と経過

（1）調査の方法

調査は平成12年7月17日から8月31日にかけて、道路拡幅工事範囲内において行ったものである。進入路確保の都合上、調査は2回に分けて行い、初めに調査を行った東側2/3の範囲を第1区、2回目に調査を行った残りの西側を第2区とした。第1区は南北長さ約14m、東西長さ約18m、幅2.5～3mのL字状、第2区は東西長さ約16m、幅2～2.5mで、掘削部分の合計面積は約120㎡を測る。また第1区は水道管や電柱、側溝などの未掘削部分によって4つのブロックに分断されているため、それぞれのブロックを1－1～4区と呼称し、遺物の取り上げはこの調査区単位で行った。また同様に分断される第2区についても、2－1・2区と呼称して調査、取り上げを行った（第4図）。

調査の方法としては、第5層上面までを重機を用いて掘削を行い、第5層以下の遺物包含層と遺構の調査を人力掘削によって行った。溝等の遺構掘削については土層観察用のセクションベルトを直交するライン上に設け写真撮影を行い、2層以上の堆積や方向性が確認できたものについては断面実測による記録保存を行った。また第7層以下の堆積状況を確認するために、第1－1～4区、第2－1・2区のそれぞれにサブトレンチ1～6を設定し、土層堆積状況及び遺物の確認を行った。

記録保存の方法としては、国土座標軸の整数値に合致した測量杭を調査範囲内に設置してこれを遺構平面実測の基準とした。平面図の縮尺は1/20で手実測によるものである。また壁面土層堆積状況図についても平面図同様縮尺1/20で手実測により作図した。遺跡の水準は国家水準点（T.P.値）を基準とした。また調査地周辺図の作成には、遺跡調査汎用システムカタタを用いた。なお土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。



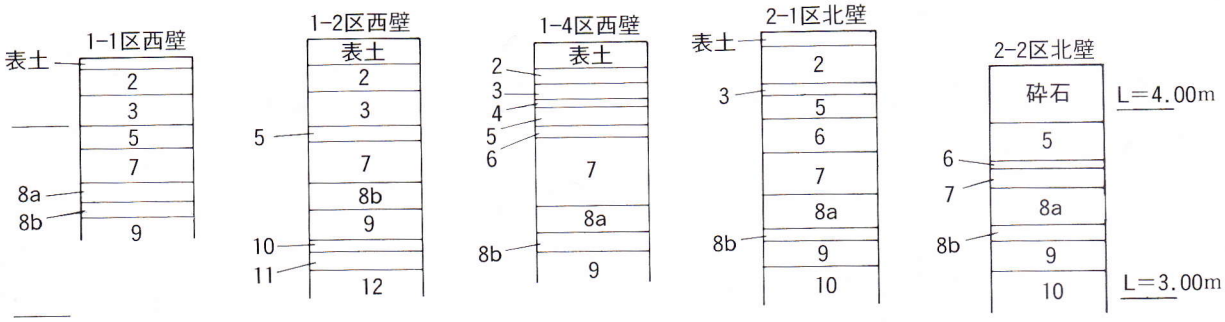
第4図　調査地区割図

（2）調査の概要

本調査地の基本層序は、第５図に示した通りである。

まず表土は、６～15㎝の厚さで堆積する近現代の整地層で、現地表面の標高は4.2～4.4ｍを測る。２－２区の表土は北隣の水田に対する盛土として、砕石層が30㎝の厚さで堆積する。第２・３層はほぼ水平に堆積する近代の整地層である。それぞれ10～20㎝の厚さをもって堆積し、第２層は明黄褐色のシルト、第３層は礫を多量に含む黄褐色系の粗砂層である。第４層は、１－４区の西端から２－１区東端のみに堆積する層で、厚さ４㎝をもつ明黄褐色の粗砂混シルトである。この層には古墳時代から江戸時代の遺物を多く含んでおり、部分的な整地土と考えられる。第５層は江戸時代の遺物包含層であり、標高４ｍ前後に10～20㎝の厚さをもって堆積する灰黄褐色のシルト層である。第６層は１－３区西半から西側のみに堆積する土層である。５㎝前後と薄く堆積しているが、２－１区では20㎝の厚みを確認できた。第７層以下第12層までは、旧河道内の堆積層である。サブトレンチを設定し、標高3.0ｍ前後まで掘削を行った結果、各層内に砂層が薄くレンズ状に堆積しているものの、大きくは拳大の河原石を多量に含む黄褐色の礫層（第７・９・12層）と灰黄褐色系の粗砂層（第８・8b・10・11層）による互層であり、それぞれ20㎝前後の厚みを測る。以上の土層は、東西方向ではほぼ水平に堆積するが、南北方向では南へ低く傾斜をもって堆積していた。この旧河道による堆積は調査区全域において確認できるが、土層の観察からは旧河道の立ち上がりは確認できない。さらに今回の調査地点が鳴神Ⅵ遺跡の中でも南限にあたることから、氾濫原の拡がりがさらに南側の微高地周辺部へ及ぶものと考えられる。また第７層以下は、弥生時代から鎌倉時代の遺物を含んでいるが、第７層は鎌倉時代まで、第８層は平安時代までの遺物を含むことから、旧河道の最終堆積の年代は鎌倉時代頃に求められる。

遺構は、第５・６・７層上面において遺構面を検出した。第１遺構面ではピット・土坑を、第２遺構面では溝・土坑・ピットを検出した。以上の遺構面は、第５・６層ともに江戸時代までの遺物を包含する土層であり、各遺構の出土遺物から第１遺構面は江戸時代後期から近代にかけてのものであり、第２遺構面も江戸時代後期の範疇であると考えられる。第３遺構面では、土坑１基を検出した。明確な時期は不明ながら旧河道埋没後に掘削されており、鎌倉時代から江戸時代までの遺構と考えられる。



2　10YR 6/3(明黄褐)シルト
3　10YR 5/3(にぶい黄褐)粗砂(2～6㎝大の礫を多く含む)
4　10YR 6/3(明黄褐)粗砂混シルト
5　10YR 5/2(灰黄褐)シルト
6　7.5Y 4/4(褐)粗砂
7　10YR 4/3(にぶい黄褐)礫
8a　10YR 4/2(灰黄褐)粗砂
8b　10YR 4/4(褐)粗砂
9　10YR 4/3(にぶい黄褐)礫(7と同じ)
10　10YR 4/4(褐)粗砂(8bと同じ)
11　10YR 4/4(褐)細砂
12　10YR 4/3(にぶい黄褐)礫(7と同じ)

第５図　土層柱状模式図

5. 遺構

本調査では、遺構面を３面確認し、その面ごとに江戸時代から近代にかけての遺構をそれぞれ検出した。以下、各遺構面ごとに記述を進め、主要なものについては詳述する。

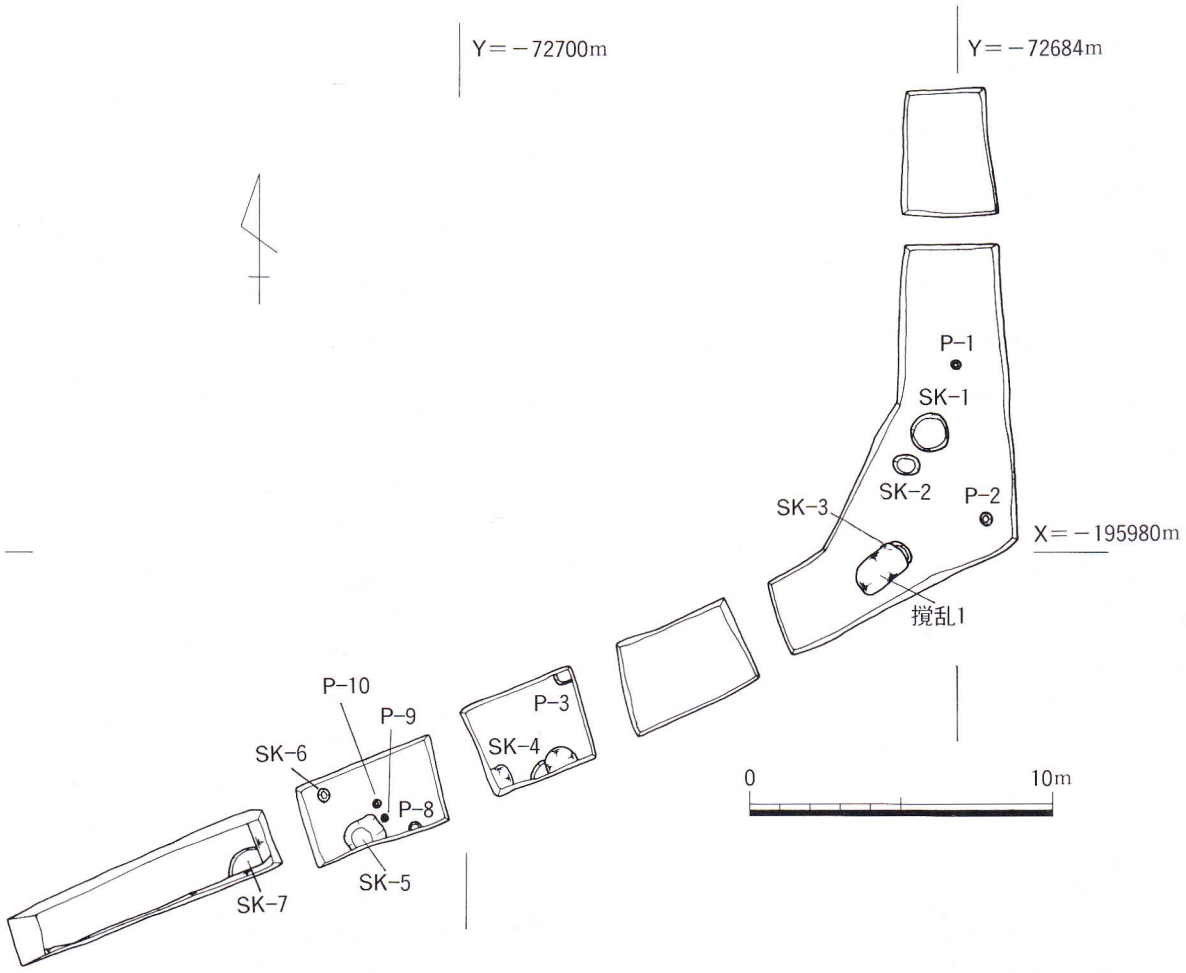
【第１遺構面】（第６図、図版２）

第１遺構面は、近現代の整地土を掘削した後、第５層上面において検出した遺構面であり、遺構面の標高は約 4.0 ～ 4.1 ｍを測る。１－１・１－３区を除く各地区で遺構を検出した。

第１遺構面で検出した遺構は、土坑６基（SK－1 ～ 7）、ピット７基（P－1 ～ 3、8 ～ 10）がある。土坑には直径 50 ～ 80 ㎝、深さ 30 ㎝を測るものと、直径 1.2 ｍ、深さ 1.0 ｍを測る規模の大きなものがあり、後者には SK－1・4・7 のように坑内に粘土を貼り付けた構造のものが見られた。ピットは直径 30 ㎝、深さ 20 ㎝前後を測るものである。これらの遺構からは、土師器、須恵器、黒色土器、中世土師器を少量、近世・近代陶磁器類、近世瓦類等が多く出土しており、江戸時代後期から近代にかけての遺構であると考えられる。

［SK－1］（第７図）

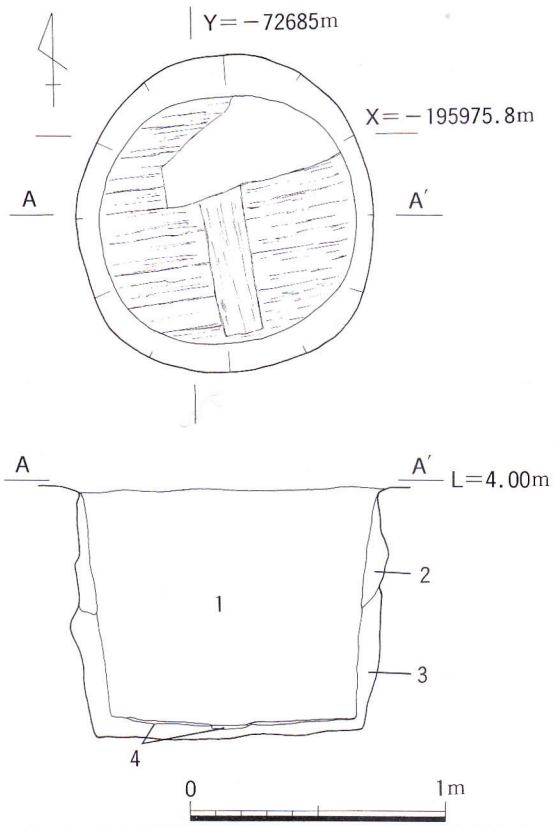
SK－1 は、１－２区のほぼ中央で検出した直径 1.2 ｍを測る円形の土坑であり、検出面からの深さは 1.0 ｍを測る。この土坑内には約 10 ㎝の厚さを測る粘土が全面に貼付けられており、粘土は上下２



第６図　第１遺構面 遺構全体平面図

層に分層できる。上層は２㎝大の円礫を一定量含む明赤褐色粘土であり、下層は２㎝大の円礫を少量含む褐灰色粘土であるが、上層とは異なり下層には中世土師器が多く含まれていた。埋土は単層で、河原石を多量に含む灰黄褐色粗砂であり、埋土内からは多量の近世瓦類及び近世・近代陶磁器類、砥石等が出土した。土坑内には桶が埋置されていたようであり、底面及び壁面の一部には、底板、側板と２条のタガの痕跡が確認できたことから、粘土を貼り、桶を固定していたものと考えられる。遺構の性格は判然としないが、貯水機能をもつ施設と考えられる。

また１－４区 SK－4 及び２－２区 SK－7 も SK－１同様に粘土による貼付けが行われていることから、同じ性格をもつ遺構であると思われるが、SK－7 については出土遺物の様相から近代以降まで機能したものと考えられる。



1　10YR 4/2(灰黄褐)粗砂(河原石を多量に含む)
2　5 YR 5/8(明赤褐)粘土(2㎝大の礫を含む)
3　10YR 5/1(褐灰)粘土(2㎝大の礫を少量含む)
4　10YR 3/2(黒褐色)シルト(木質痕跡)

第７図　SK－１遺構平面図及び土層断面図

【第２遺構面】（第８図、図版３）

第２遺構面は、第１遺構面を形成する第５層掘削後の第６層及び第７層上面において検出した遺構面である。遺構面の標高は約 3.8 ～ 4.0 ｍを測る。遺構は調査区全域にかけては見られず、１－１区を除く各地区で遺構を検出したが、調査区の中央付近に密集して確認できた。

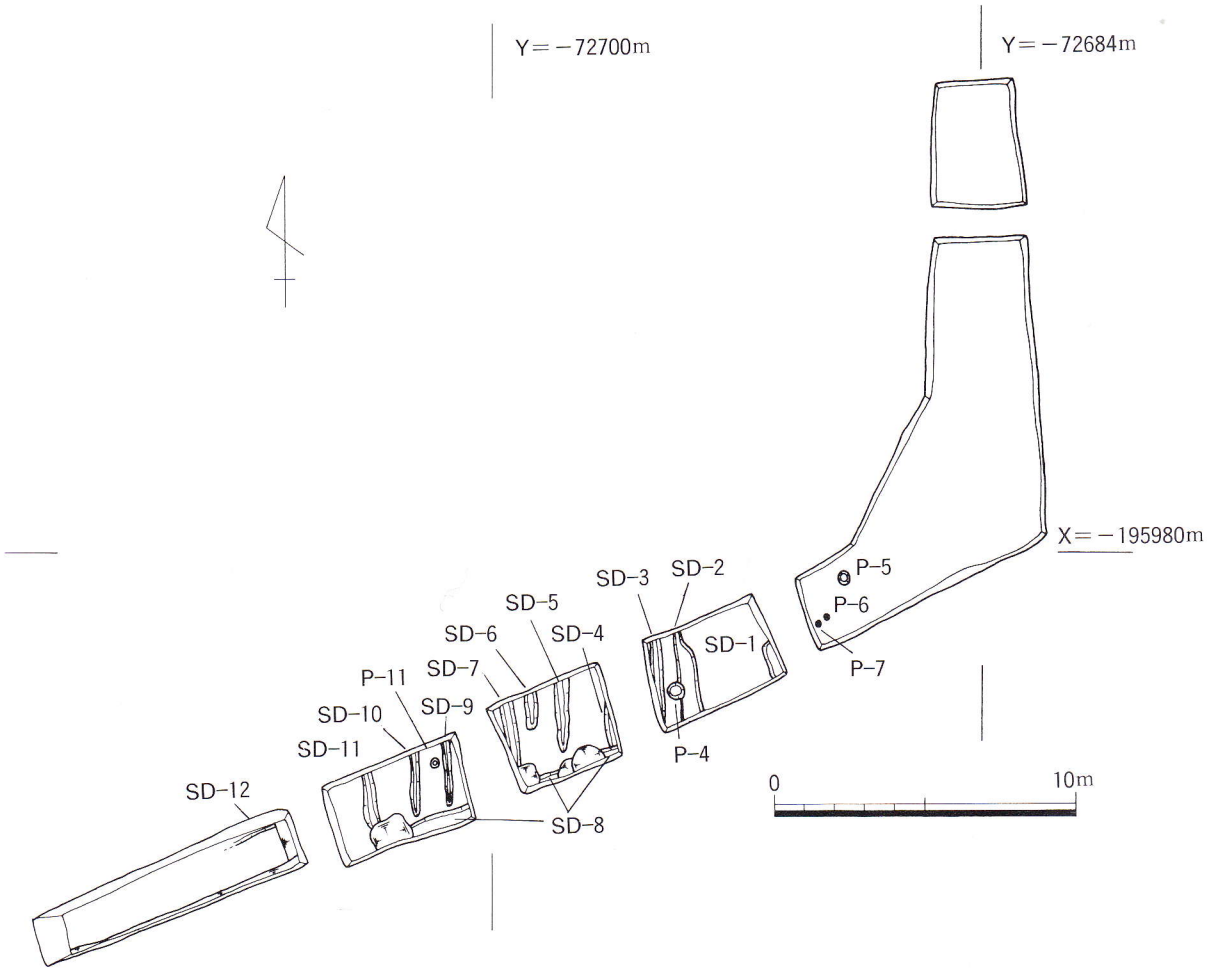
この第２遺構面では、南北方向の溝 10 条、東西方向の溝３条、ピット５基を検出した。

［SD－1 ～ 12］（図版４）

溝は南北方向と東西方向の溝がある。南北方向の溝（SD－1 ～ 7、 9 ～ 11）は幅 30 ～ 40 ㎝、検出面からの深さは５～ 15 ㎝を測るもので、N－２～ 8°－ W の方向性をもつ。東西方向の溝(SD－8、12)は、幅 30 ～ 40 ㎝以上、検出面からの深さは 15 ～ 20 ㎝を測るもので、N－ 72°－ E の方向性をもつ。これらの溝の埋土は単層で、河原石を多量に含む灰黄褐色の細砂混シルトであり、埋土内からは少量の須恵器、黒色土器、中世土師器、肥前系磁器等が出土した。出土遺物が少ないため、明確な時期は不明であるが、おおむね江戸時代後期のものと考えられる。また東西方向と南北方向の溝の関係については、SD－4 と SD－8 の切り合い関係から、南北方向の溝が東西方向のものより先行すると考えられる。溝の性格については、耕作に関連する小溝の可能性が考えられる。

［P－4 ～ 7、11］

ピットは直径 10 ㎝、深さ 20 ㎝前後を測る杭状のもの、直径 30 ～ 40 ㎝、深さ 15 ～ 20 ㎝前後を測るものがある。埋土は灰黄褐色の細砂混シルトであり、少量の土師器、須恵器、瀬戸美濃系の磁器が出土している。これらのピットは、第７層上面で検出したが、埋土の状況が溝と類似することから、ほぼ同時期のものと考えられる。



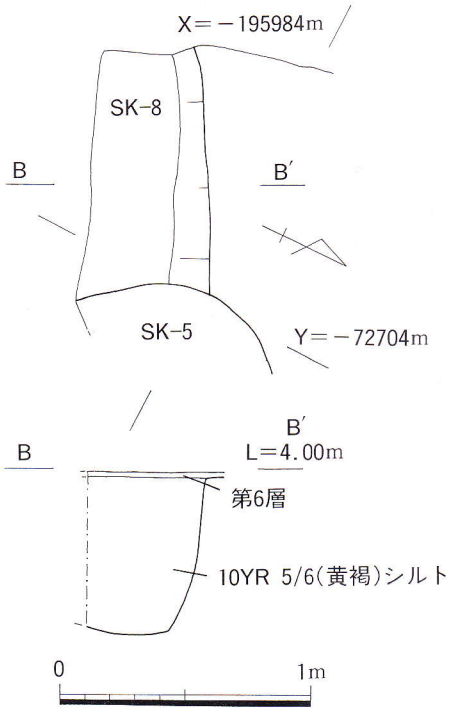
第８図　第２遺構面 遺構全体平面図

【第３遺構面】

第３遺構面は、第２遺構面を形成する第６層掘削後の第７層上面において検出したものであり、遺構面の標高は約3.7 ～ 3.9 mを測る。遺構として確認できたものはSK－８のみであり、遺構の存在は極めて希薄である。

［SK－８］（第９図、図版５）

SK－８は、２－１区の南西隅で検出したものである。調査区南壁及び西壁外へ延び、さらにSK－５とも切り合うことから全体の規模・形状は不明である。検出面からの深さは0.6 mを測る。埋土は単層で、黄褐色のシルトであり、埋土内からは土師器が少量出土した。SK－８は出土遺物から時期を比定することは困難であるが、SK－８が旧河道の堆積後の遺構であること、第６層上面より掘削されたSD－11に切られることから、旧河道の埋没する鎌倉時代から江戸時代後期の範疇であると考えられる。



第９図　SK－８遺構平面図及び土層断面図

6. 遺物

今回の調査で出土した遺物には、遺構の覆土及び、第１～12層の堆積層から出土したもので、弥生時代から近代に至る時期の遺物が出土している。しかし、旧河道の堆積層である第７層以下から出土した遺物については小片が多く、保存状態の良好なものは少ない。

弥生時代から古墳時代の遺物は、第７層以下から出土したものが大半である。弥生時代の遺物は、中期を中心とした土器が微量出土している。古墳時代の遺物は、前期から後期に至る遺物があり、後期の土師器壺・甕、須恵器杯身・甕が少量出土した。平安時代から鎌倉時代の遺物については、第８層から上層で出土している。平安時代の遺物は極微量であり、土師器及び黒色土器が出土している。鎌倉時代の遺物については、土師器皿、須恵器、瓦器が少量出土した。江戸時代以降の遺物は第１～６層及び第１遺構面の遺構から多く出土しているが、その大半は江戸時代後期から近代にかけてのものである。江戸時代のものとしては、肥前系磁器碗・皿、瀬戸美濃系陶磁器の碗、堺焼擂鉢、産地不明陶器、灯明具、火鉢等がある。

土器以外の遺物では、瓦、石器・石製品、金属製品、自然遺物がある。瓦については、第１～６層及び第１遺構面検出の遺構から丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、隅軒丸瓦、鬼瓦等が多量に出土している。これらのほとんどが江戸時代の範疇のものである。石器・石製品ではサヌカイト剝片が３点、砥石１点等が出土した。金属製品では第５層からキセル、P-8・10から鉄釘等が出土している。自然遺物では、第５層からアワビの破片とみられる貝類の他、炭が微量出土した。

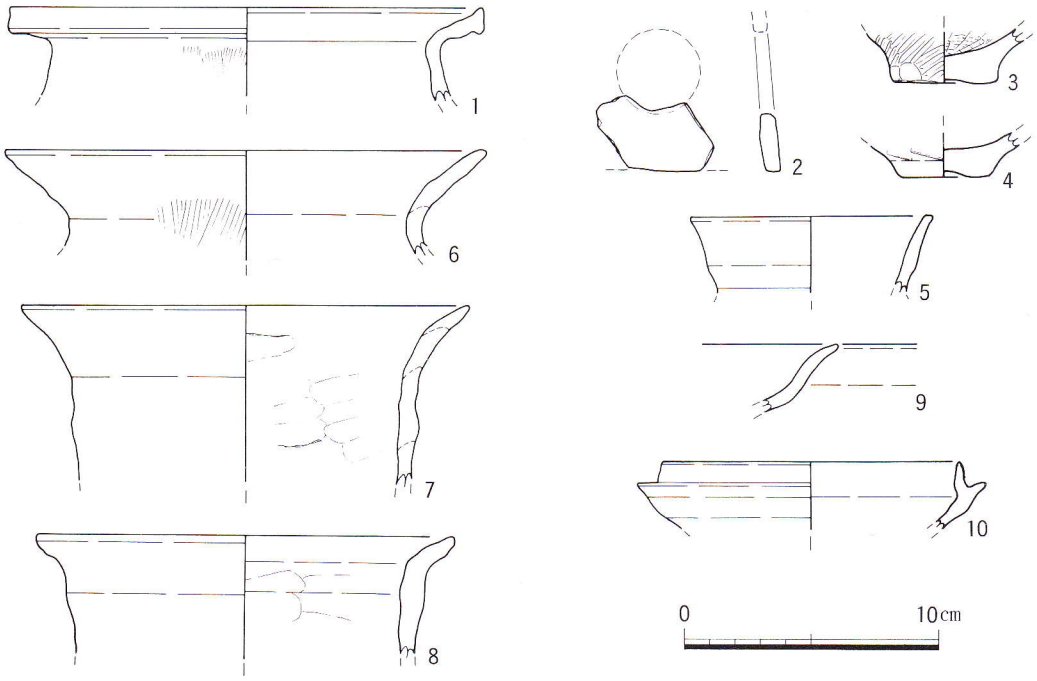
本報告ではこれらの遺物について、土器は大きく各時代に分類して述べ、瓦、石製品を最後に記述した。

（1）弥生時代・古墳時代の土器（第10図、図版８）

１・２は弥生土器である。１は甕で、口径18.6㎝を測るものである。口縁部はヨコナデにより外反させ、端部に面をもつ。器表面の磨滅が著しいが、外面はタテハケ、内面はナデによる調整と考えられる。２は鉢の脚部と思われるものである。底部から2.3㎝の位置には、直径3.2㎝の円孔が外面側から穿孔される。色調は黒褐色を呈する。１・２の胎土には、結晶片岩・石英を一定量含んでいる。ともに中期後半に位置づけられるものと考えられる。１は第７層、２が第５層から出土した。

３・４は庄内式併行期の土器である。３は甕の底部で、底径4.0㎝を測り、底部中央はやや上げ底状である。外面にはタタキによる成形痕が認められ、内面にはいわゆる蜘蛛の巣状ハケ目の痕跡を残す。４は底径3.2㎝を測る壺又は甕の底部で、丸みを帯びた底部の中央は３同様上げ底ぎみである。外面は叩きによる成形の後、ナデ調整される。外面には炭化物の付着が確認できる。胎土中には結晶片岩・石英を多量に含み、色調は赤褐色を呈する。３・４ともに第７層から出土した。

５～９は土師器である。５は小型丸底壺の口縁部で、口径9.4㎝を測るものである。外反しながらひらく口縁端部は若干面をもつ。６～８は甕である。６は「く」の字形の口縁部を呈し、大きく外反させるもので、体部も球形を呈するものと考えられる。外面をタテハケ、内面をナデにより調整する。７・８は６とは異なり、肩部が張らず、体部は底部にむかって直線的にのびるものである。



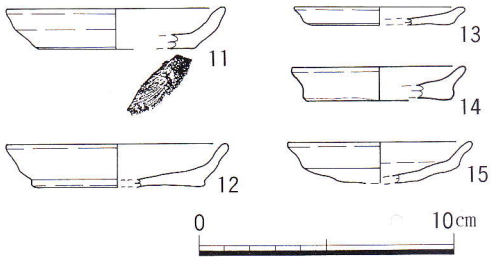
第 10 図　遺物実測図 1

7は大きく外反させる口縁部をもち、指押さえ、ナデによる成形後、全面をナデ調整する。8も口縁を外反させるものであるが、6・7とは異なり端部を肥厚させる形態のものである。内外面ともにナデによる調整が行われる。9は高杯の杯部で、口縁端部をヨコナデによって外反させるものである。5～9の出土位置は、5・7・9が第8層、6が第5層、8が第9層である。

10は口径 11.6 ㎝を測る須恵器の杯身である。口縁部は直立ぎみに立ち上がり、受け部は短く外上方につまみ上げる。胎土中には、石英を微量含む。第8層から出土した。

（2）鎌倉時代の土器（第 11 図、図版 9）

11 ～ 14 は土師器の皿である。11・12 は体部から外上方にのび、ヨコナデによって口縁部を外反させる形態を呈する。底部は平底で、11 には明瞭な回転糸切りの痕跡を残し、12 も磨滅により不明瞭ではあるが、その可能性がある。法量については、11 が口径 8.6 ㎝、器高 1.6 ㎝、底径 6.2 ㎝、12 が口径 8.8 ㎝、器高 1.7 ㎝、底径 6.8 ㎝を測る。13・14 は器高が低く扁平で、ヨコナデにより口縁部を短くつまみ上げる形態のものである。法量は 13 が口径 6.8 ㎝、器高 0.7 ㎝、底径 5.8 ㎝、14 が口径 6.8 ㎝、器高 1.3 ㎝、底径 6.0 ㎝を測る。以上の土師器皿の胎土中には結晶片岩、赤色軟質粒が少量含まれる。これらの出土位置は、11 が第 5 層、12 が第 7 層、13 が SD－8、14 が SK－1 である。



第 11 図　遺物実測図 2

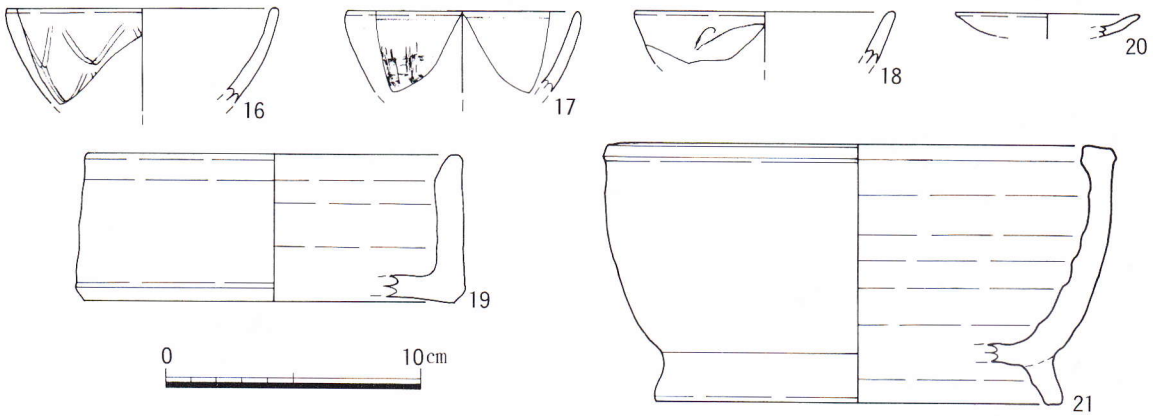
15は口径7.2㎝、器高1.6㎝を測る瓦器の皿である。ナデと指押さえによって成形し、ヨコナデ調整により口縁部を外反させるものである。また見込み部には、棒状のミガキが密に施される。第3層から出土した。

（3）江戸時代の土器（第12図、図版9）

16～18は肥前系磁器の染付碗である。16・17の体部は外上方に緩やかにのび、口縁端部を丸くおさめるものである。16の外面には二重網目文が描かれ、呉須は灰味を帯びる。法量については16が口径10.6㎝、17が口径9.2㎝を測る。18は器壁がやや厚く、端部も短く外反させる形態を呈する。外面にはやや灰味を帯びた呉須により草花文が描かれる。以上の出土位置は、16・17が第5層、18が第7層であるが、18については第5層からの混入である可能性が高い。

19は口径14.8㎝、器高5.8㎝、底径15.2㎝を測る陶器の建水である。ミズビキ成形した後、体部と底部の境を削りによって調整する。胎土中には石英を一定量含み、赤褐色に発色する。また底部には、重ね焼き時に使用した離れ砂の痕跡が確認できる。産地については判然としないが、備前焼の可能性がある。SK－3から出土した。

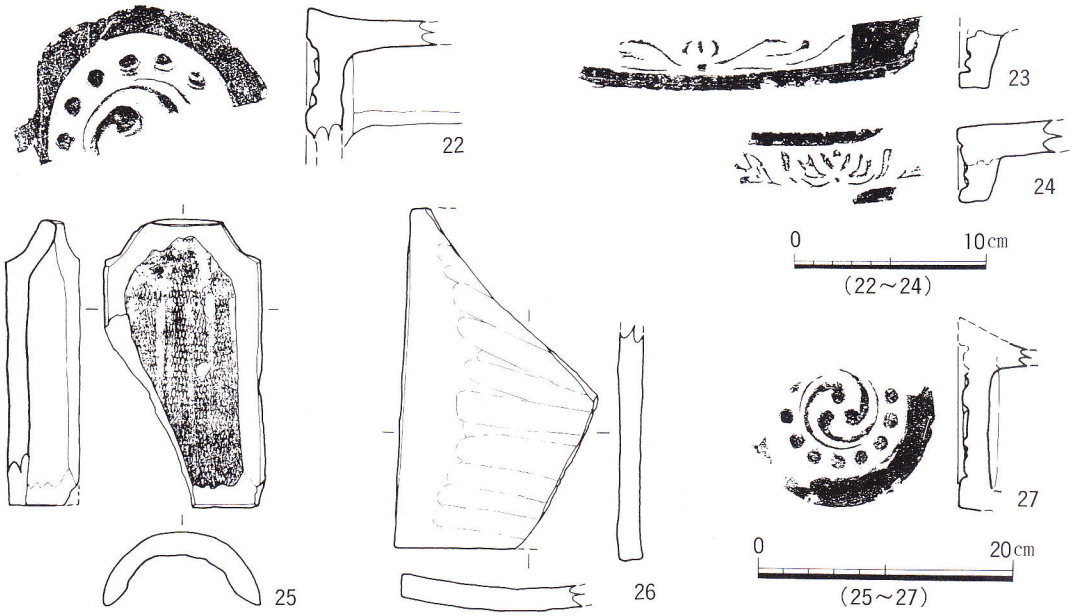
20は口径7.2㎝を測る土師質の灯明皿である。口縁外端部から内面にかけては、透明釉が施される。21は口径20.2㎝、器高10.1㎝、底径16.0㎝を測る土師質土器の火鉢である。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部に至って肥厚させる形態のものであり、体部と底部の境には脚の高い高台が貼付けられる。また底部は円板充填によって製作されていたようで、その接合面で剥離している。ミズビキにより成形した後、外面を丁寧にヨコナデ調整し、さらにタテ方向の棒状ミガキを2㎝おきに施している。以上の出土位置は、20が第5層、21がSK－1である。



第12図　遺物実測図3

（4）瓦（第13図、図版10）

22は瓦当径13.6㎝測る三巴文軒丸瓦である。巴は左巻きで、巴の頭部及び珠文はやや肥大化しており、珠文の復元数は12個である。丸瓦凹面には内叩き痕がみられる。22に使用された笵は過度に使用されているようであり、瓦当文様から笵の彫り直しが確認できる。また瓦当部と丸瓦を接

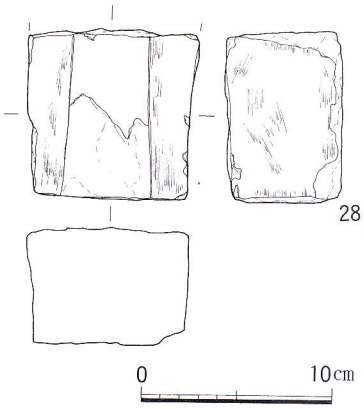


第 13 図　遺物実測図 4

合する際には、板状工具によるナデ調整が施される。23・24 は唐草文を主文様とする軒平瓦である。ともに瓦当厚が 2.2 ㎝を測り、薄手なつくりである。また瓦当部の接合にあたりカキメによる接合強化が認められ、23 についてはその接合面で剥離している。24 は文様の彫りが浅く、瓦当面にはキラコの付着が認められる。25 は丸瓦で、全長 22.4 ㎝、弧深 4.0 ㎝を測る。凹面には約 1 ㎝幅の内叩き痕がみられ、それに先行するゴザ状圧痕が確認できる。26 は全長 26.5 ㎝を測る平瓦であり、厚さは 1.8 ㎝と薄いつくりである。凸面には離れ砂が確認できることから、凹型成形台による製作と考えられ、凹面には板状工具によるナデ調整が行われる。27 は瓦当径 14.2 ～ 14.8 ㎝を測る三巴文の隅軒丸瓦である。巴は左巻きで、珠文の数は 13 個が復元できる。また瓦当部の接合にあたっては、カキメによる接合強化が認められる。これらの出土位置は、22・27 が撹乱 1、23・25 が SK－4、24・26 が SK－1 である。

（5）石製品（第 14 図、図版 10）

28 は堆積岩を用いた砥石である。長さ 8.9 ㎝、幅 8.6 ㎝を測るが、1 面に明らかな破損面が確認できることから、本来はもう少し規模の大きなものであると思われる。6 面中確実な使用面は 2 面であり、その内 1 面は全面を使用するのではなく、面の両側を使用しているため、面の中央のみが粗加工のまま残されている。またもう 1 面は使用により弧状を呈し、不定方向の擦痕が認められる。SK－2 から出土した。



第 14 図　遺物実測図 5

7. まとめ

鳴神Ⅵ遺跡は『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に散布地と記載されているが、旧河道の堆積と考えられる砂礫層がこれまでに行われた全ての調査において検出されており、鳴神Ⅵ遺跡全体が旧河道の氾濫原にあたることが明らかになってきている。今回の第５次調査は鳴神Ⅵ遺跡でも南側縁辺部に位置するが、３面の遺構面と共に氾濫原の堆積を検出し、本調査地点も氾濫原の範囲に含まれることが明らかになった。また堆積の方向性を知るために各調査区でサブトレンチを設定して掘削・断面観察を行ったが、河道南岸部の立ち上がりなどは確認できなかった。古墳時代における地形環境や周辺の集落及び氾濫原の推定範囲については、既刊の概報等に復原案が提示されている[註1]が、今回の成果によって、調査地周辺部分の状況を明確にすることができたとともに、氾濫原の範囲は本調査地よりもさらに南方に広がるものと考えられる（第 15 図)。

本調査地における旧河道の最終堆積は出土遺物から鎌倉時代頃と考えられ、当該期までの河道南岸部は当地のさらに南側に位置していたものとみられる。江戸時代の河道を既往の調査成果からみてみると、第４次調査では河道の南岸部が検出されており[註2]、第３次調査の北側では標高 3.7 m付近において北から南側に向かって立ち上がっていく堆積状況が確認できる[註3]。その堆積土の類似性、標高、方向性を勘案するならば、同一時期の河川南岸部にあたるとみられ、江戸時代における河道を第 15 図のように復原できる。また第１・３次調査及び今回の第５次調査で検出されている小溝群からみて河道南岸周辺では耕作地が展開していたと考えられる。河道はその後方向性を北西に変更され、現在の大門川に至るとみられる。

次に出土遺物の様相をみてみると、第７層以下から出土した遺物には、弥生時代の土器片、古墳時代の土師器壺・甕や須恵器杯身・甕、平安時代の土師器、黒色土器、鎌倉時代の土師器皿、須恵器、瓦器がみられる。第１～４次調査と同様に各時代の土器が出土しているが、いずれも出土量は少ない。出土した土器の多くは磨滅しており、他の集落から河道へ流入したものと考えられる。そこで周辺地域を概観してみると、南東には鳴神Ⅳ遺跡や音浦遺跡が位置している。鳴神Ⅳ遺跡では弥生時代の遺構は確認されていないが、弥生時代中期・後期の遺物が数点確認されている。古墳時代には鳴神Ⅳ遺跡・音浦遺跡において集落が営まれ、竪穴住居や掘立柱建物、溝が検出されている。また、鳴神Ⅳ遺跡では鎌倉～室町時代の土坑・溝、江戸時代の土坑が検出されている。本調査地で出土した遺物は、このような近接した遺跡からもたらされたものとみられるが、氾濫原が広範囲に及ぶことや著しく磨滅した土器が存在することを考えると、遠方の集落から流されてきた遺物が含まれている可能性がある。

以上、今回の調査によって、本調査地が江戸時代以前の氾濫原の範囲内であることを確認できたと共に、江戸時代における土地利用について知ることができた。今後、鳴神周辺に存在したとみられる各時代の集落の様相を明確にしていくためにも、本遺跡の調査によって氾濫原の範囲を確認していく必要がある。

註記

1 周辺の遺跡における地形環境については、以下の文献が挙げられる。

『鳴神Ⅴ遺跡 発掘調査概要報告書』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1994 年

『鳴神Ⅳ遺跡 第６次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995 年

額田雅裕「太田城付近の地形環境」『和歌山市立博物館　研究紀要２』 和歌山市立博物館　1987 年

また、周辺の集落及び氾濫原の推定範囲については、以下の文献に復原案が提示されている。

「鳴神Ⅳ遺跡第８次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報５』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1998 年

2 『鳴神Ⅵ遺跡 第４次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1995 年

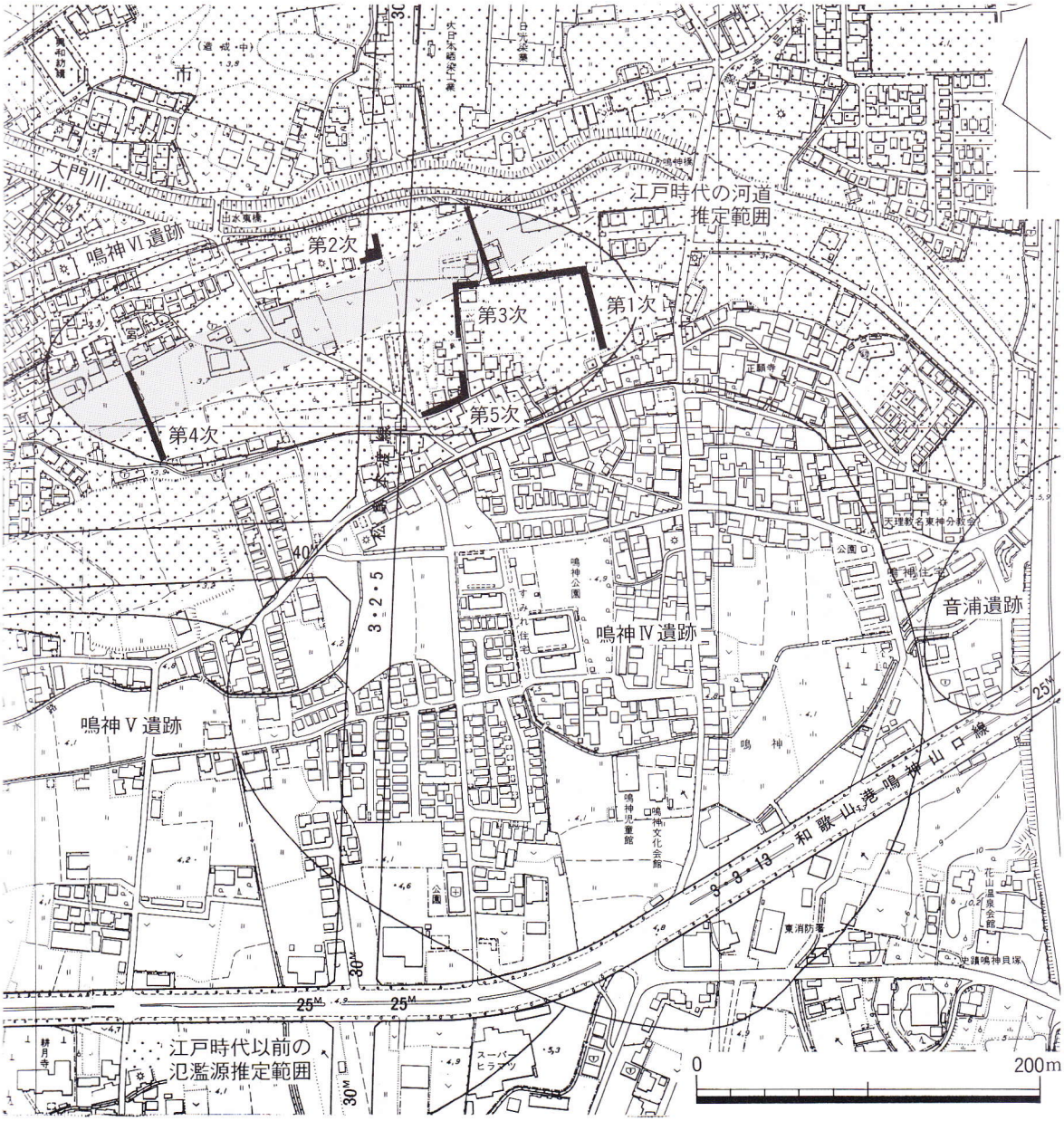
3 『鳴神Ⅵ遺跡 第３次発掘調査報告書』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1992 年

【参考文献】

『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』 和歌山県教育委員会　1984 年

『鳴神Ⅵ遺跡 発掘調査報告書』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1991 年

『鳴神Ⅵ遺跡 第２次発掘調査報告書』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1992 年



第 15 図　鳴神Ⅵ遺跡周辺の旧地形復原図

報 告 書 抄 録

ふりがな	なるかみろくいせき だい5じはっくつちょうさがいほう
書名	鳴神VI遺跡 第5次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書
シリーズ番号	第26集
編著者名	高橋方紀・川口修実
編集機関	財団法人 和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640-8227　和歌山県和歌山市西汀丁29　TEL073-435-1195
発行年月日	西暦　2001年3月31日

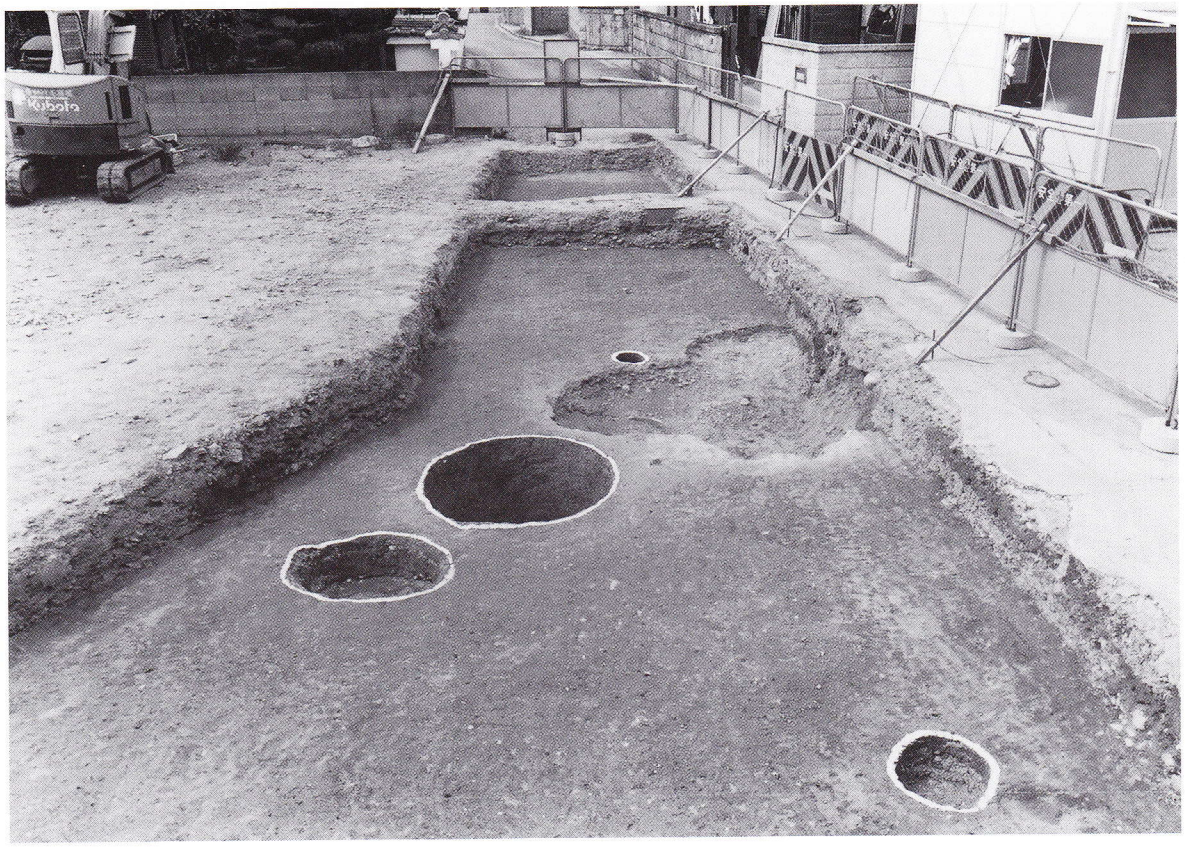
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なるかみろくいせき 鳴神VI遺跡	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 なるかみ 鳴神	3020150	320	34° 13′ 51″	135° 12′ 40″	20000717 20000831	120	道路拡幅 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳴神VI遺跡	散布地 河道	弥生時代 〜 江戸時代	溝、土坑 ピット	弥生土器・土師器 須恵器・瓦器 黒色土器・陶磁器 瓦	鎌倉時代以前の氾濫原の堆積を確認

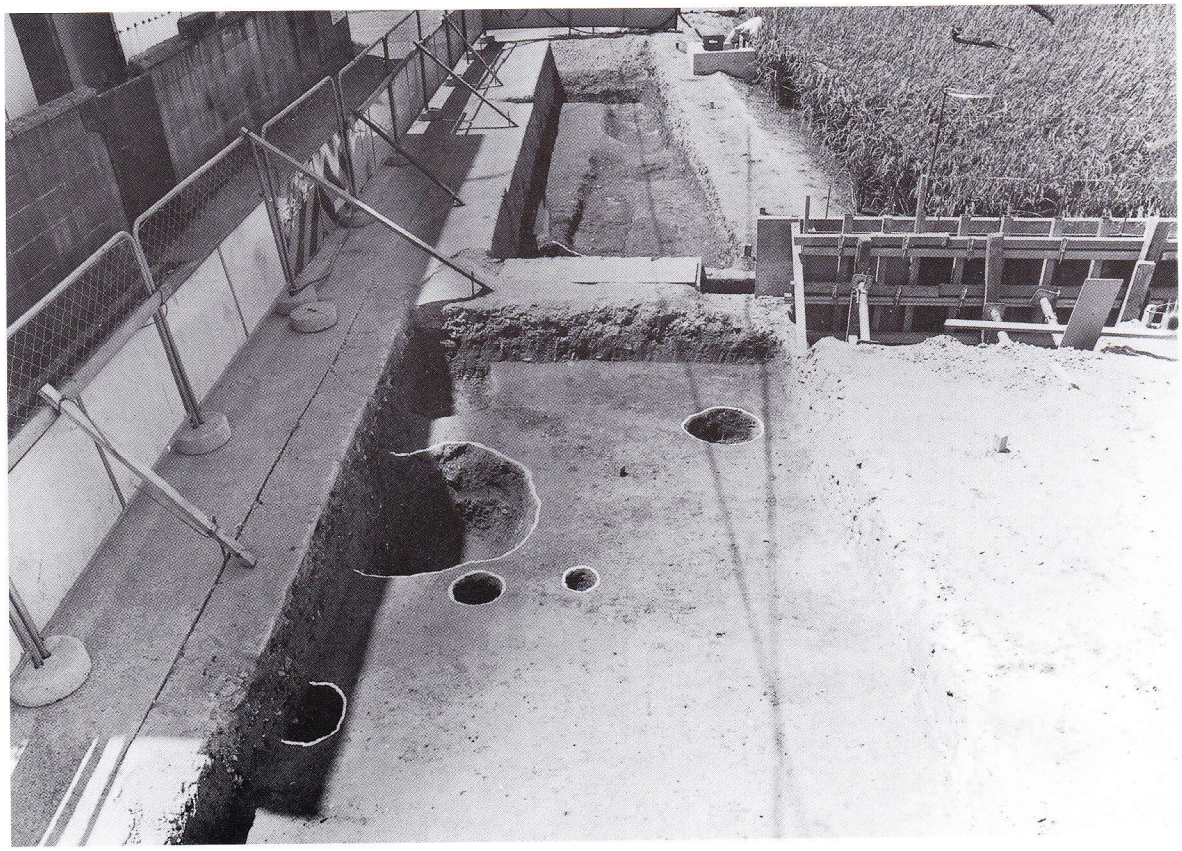
図　　版

調査前の状況（北東から）

調査前の状況（西から）

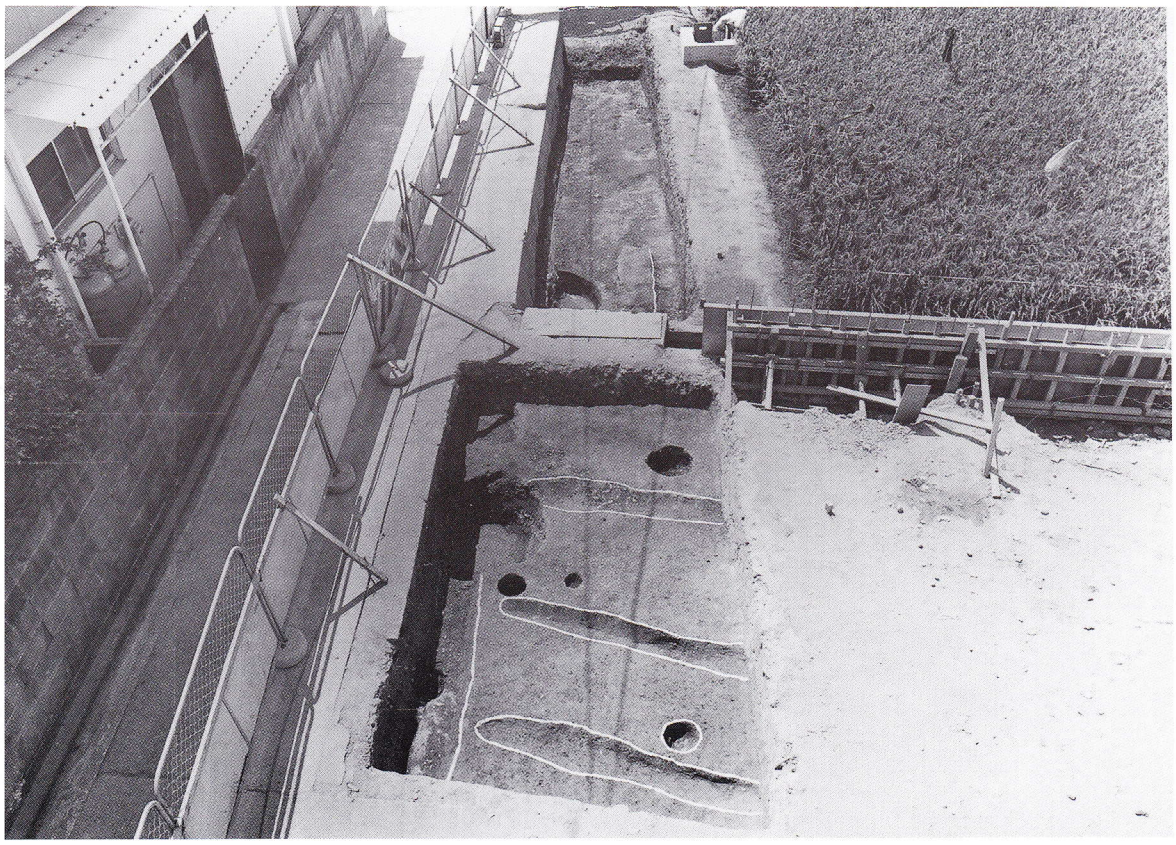


第1区 第1遺構面全景（南から）

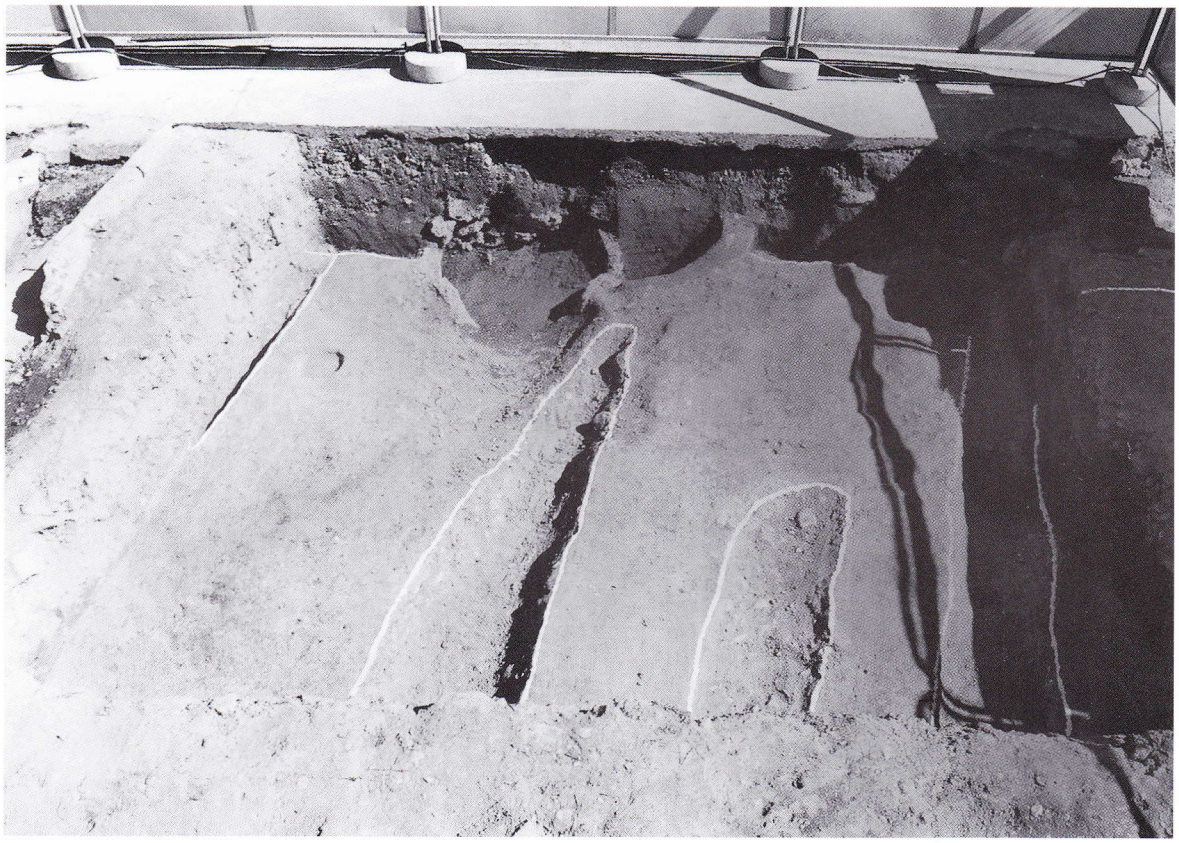


第2区 第1遺構面全景（東から）

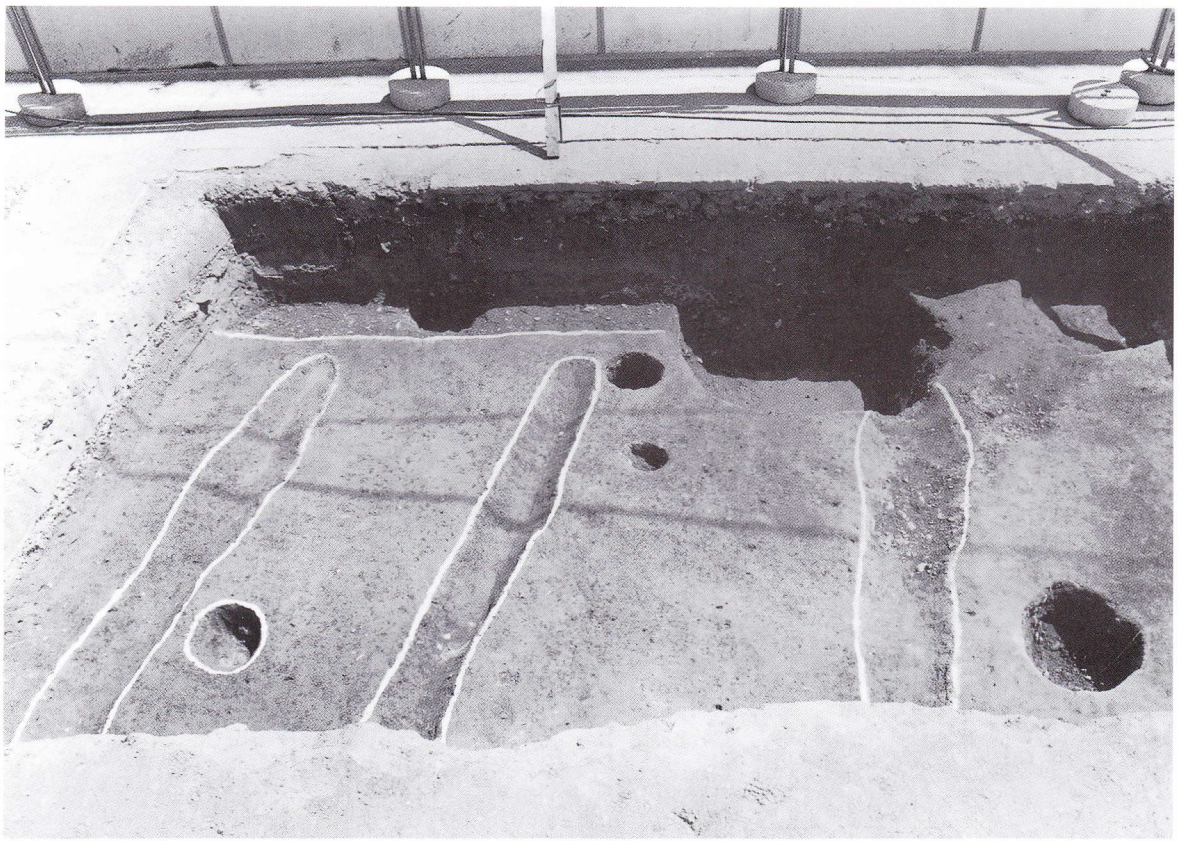
第1区 第2遺構面全景（西から）



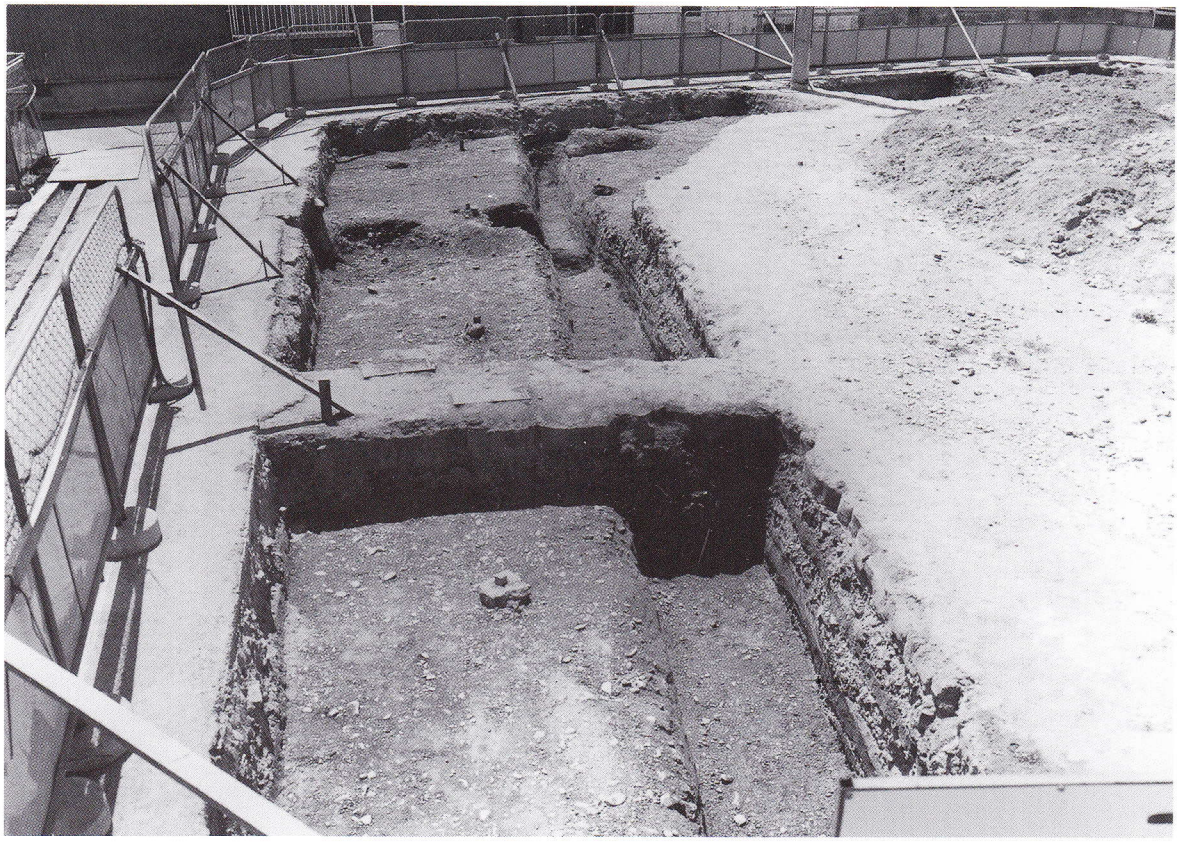
第2区 第2遺構面全景（東から）



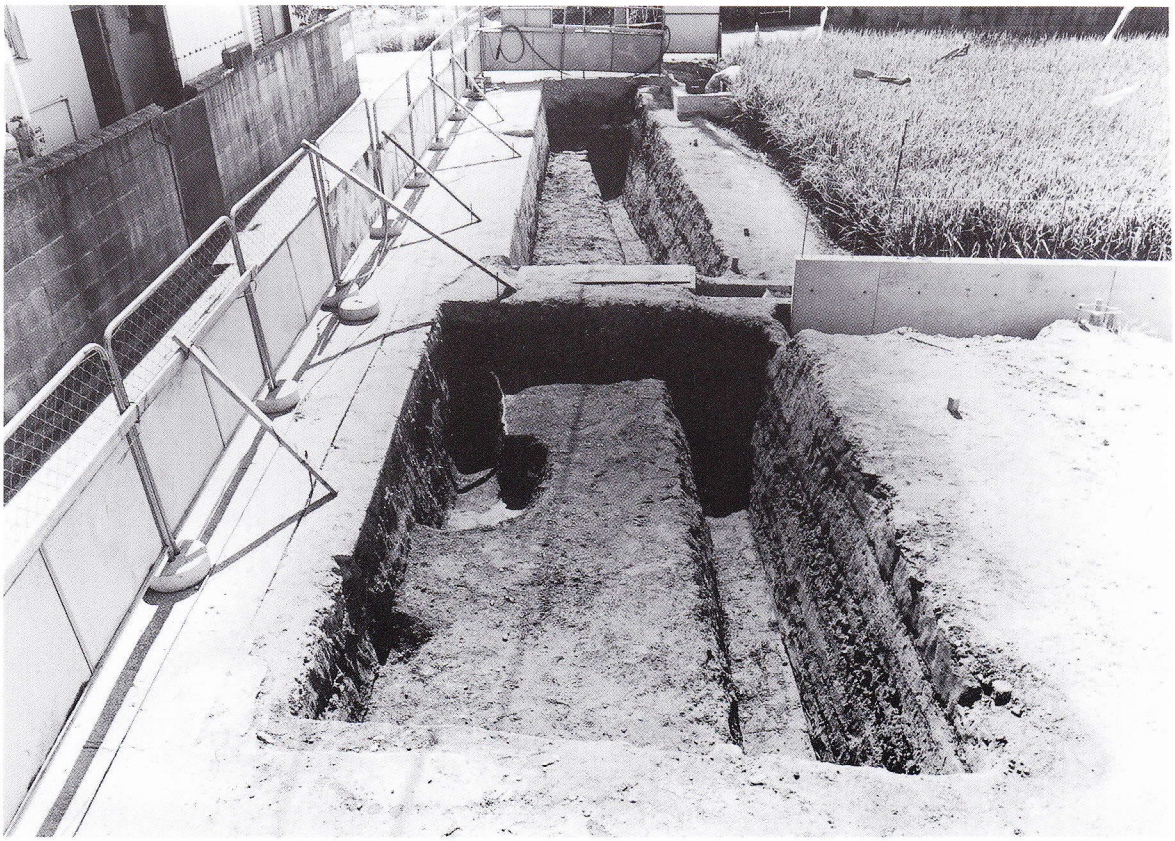
1－4区 SD－4～8（北から）



2－1区 SD－8～11、P－11（北から）



第1区 サブトレンチ1全景（北から）



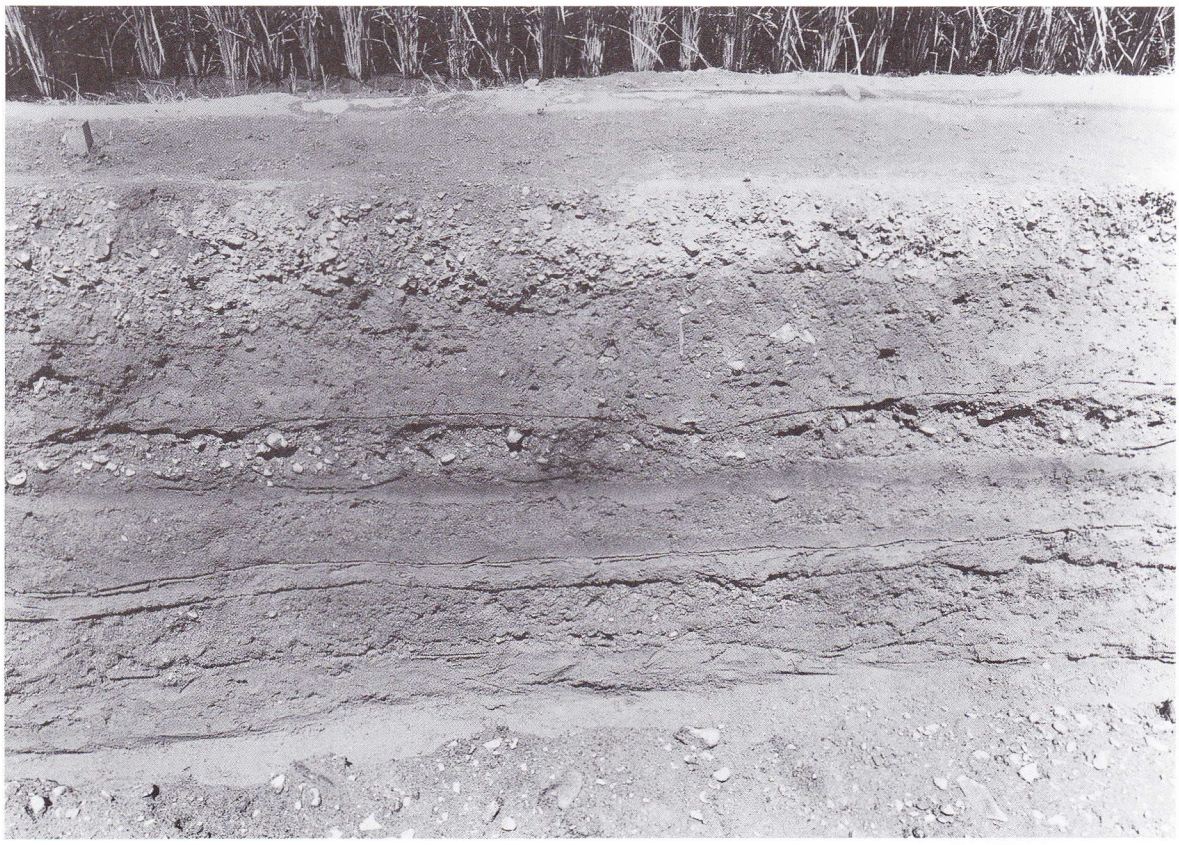
第2区 サブトレンチ4・5全景（東から）

図版6

1－2区 西壁土層堆積状況（東から）

1－4区 西壁土層堆積状況（東から）

2－1区 北壁土層堆積状況（南から）

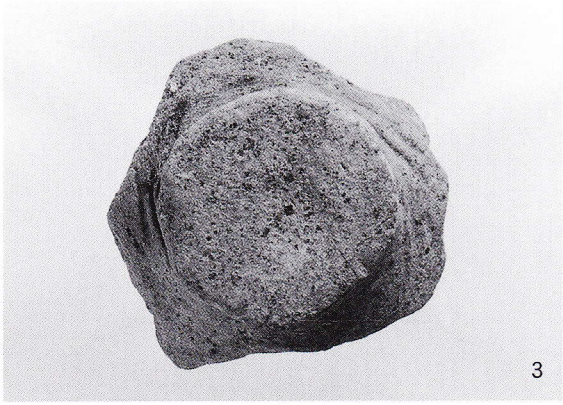


2－2区 北壁土層堆積状況（南から）

図版8

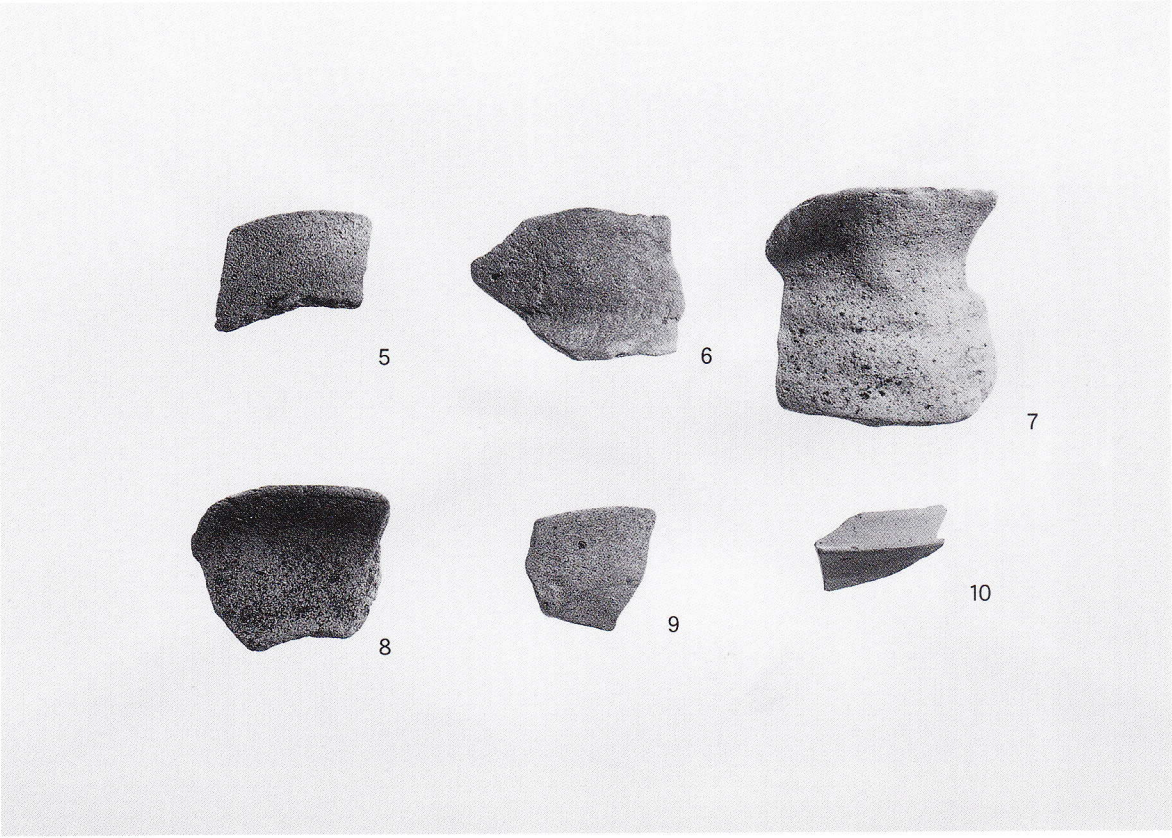
1 弥生土器 甕

2 弥生土器 鉢

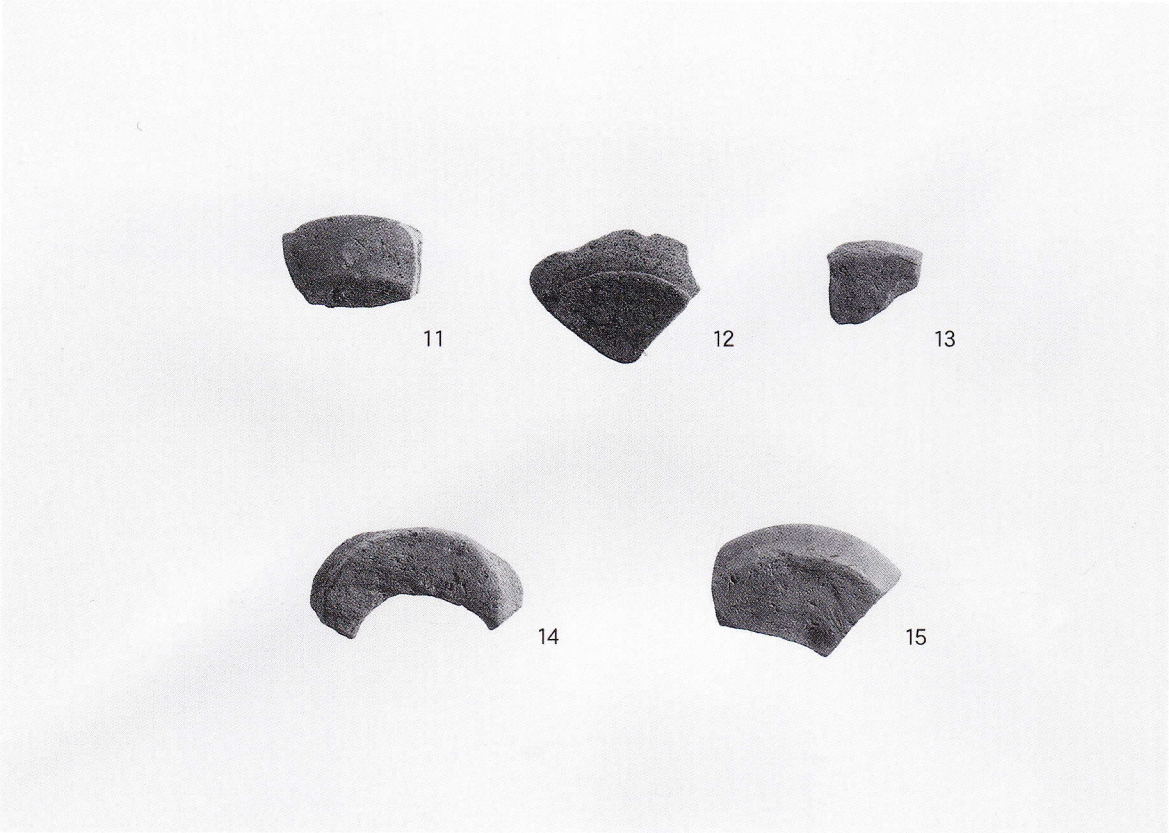


3 土師器 甕

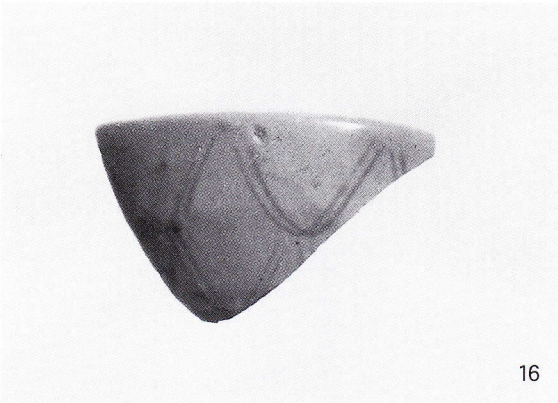
4 土師器 壺



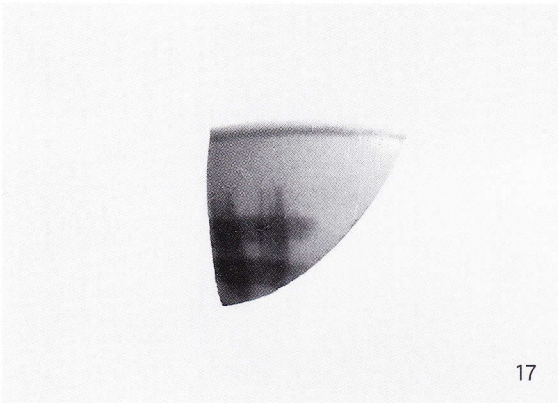
土師器 5 小型丸底壺、6～8 甕、9 高杯　須恵器 10杯身



土師器 11～14 皿　瓦器 15 皿



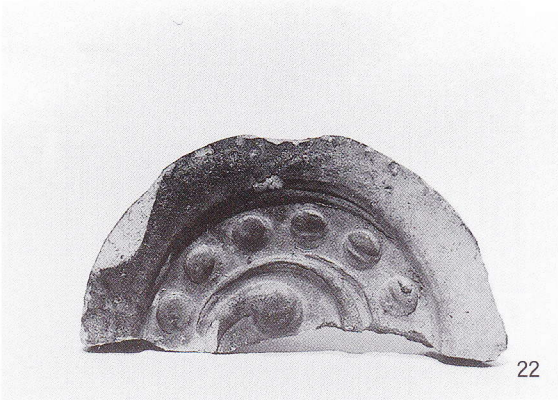
16 肥前系磁器 染付碗



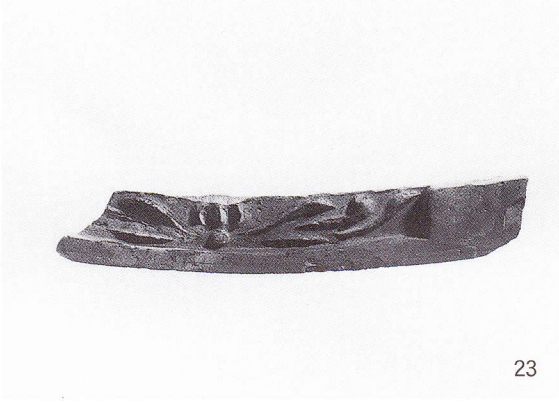
17 肥前系磁器 染付碗

19 産地不明陶器 建水

21 土師質土器 火鉢

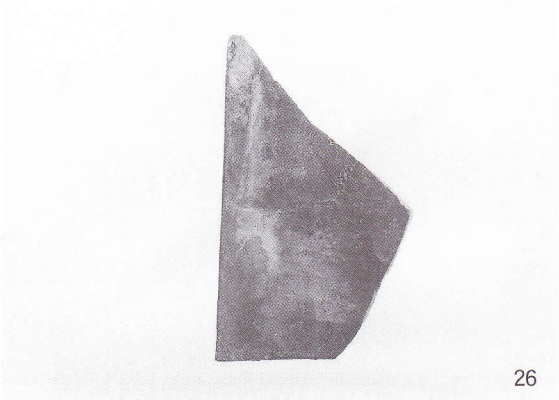


22 軒丸瓦



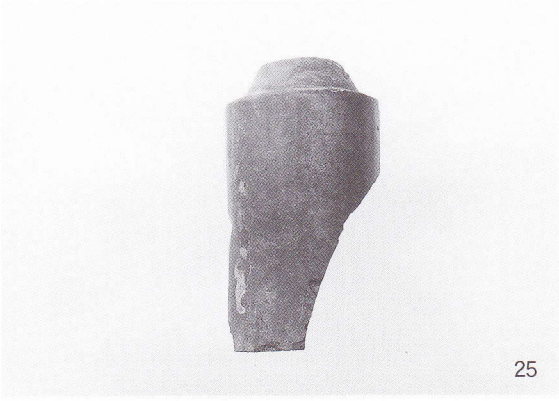
23 軒平瓦

24 軒平瓦



26 平瓦

25 丸瓦（凹面）



25 丸瓦（凸面）

27 隅軒丸瓦

28 石製品　砥石

和歌山市教育委員会
文化財室
受付

平成13年３月31日発行

鳴神VI遺跡　第５次発掘調査概報

編集・発行　(財)和歌山市文化体育振興事業団
和歌山市西汀丁29番地
印　　刷　中央印刷株式会社

Ⓒ(財)和歌山市文化体育振興事業団 2001